

レイウィン・コンネル著／伊藤公雄訳（新曜社、2022年）

マスキュリニティーズ 男性性の社会科学

小口 藍子*

男性学や男性性研究、ひいてはジェンダー研究に興味を持つ人であれば、著者の名を一度は聞いたことがあるのではないだろうか。本書はオーストラリアの社会学者レイウィン・コンネル (Raewyn Connell) による *Masculinities* 第二版 (2005) の日本語訳書である。訳者が評する通り、著者の「男性性研究の集大成的な一冊」(374頁)たる本書の議論は、初版が1995年に刊行されて以降、世界的に大きな影響を与えた。

Masculinities は既に広く読まれ、批評も多く蓄積されている¹。ゆえに本稿では内容紹介と評価に留まらず、訳書である本書が刊行されたことが日本語圏でどのような議論を可能にするかも併せて考察したい。

本書は三部構成をとる。第Ⅰ部ではまず、男性性を論じるにあたって社会科学の理論が必要であることが主張される(第1章)。著者は男性性を個人内部に独立して存在するものというより、社会的なジェンダー関係を通じて構成されるものとして捉えようとする。さらに著者は身体が「男性性の構築において不可避」(72頁)であるとして、身体と実践の議論(「身体－再帰的实践」、77-84頁)に焦点を当てる(第2章)。

これを踏まえ、具体的な男性性理論が提示される(第3章)。男性性は社会的なジェンダー関係のシステムなしには存在しない。ゆえに男性性および女性性は「ジェンダー実践の布置連関」(94頁)である。布置連関(configuration)としての男性性は複数形をとり、それらの間には「ヘゲモニー、支配／従属と共謀」(105頁)、「周辺化／権威化」(105頁)という関係性がある。さらに複数の男性性と女性性とが織りなすジェンダー関係は、歴史のなかで常に変化に開かれると著者は論じる。

これを踏まえ第Ⅱ部では、オーストラリアで男性性として生きる／生きた経験を持つ人々のライフ

ヒストリーが扱われる。分析対象は労働者階級の男性たち(第4章)、環境保護運動とフェミニズムに取り組む男性たち(第5章)、ゲイコミュニティの男性たち(第6章)、技術専門職に従事する男性たち(第7章)である。

4集団の分析を通して著者は、男性たちがジェンダー関係の平等化をめぐって両義的な立場にあることを確認する。男性たちの実践はしばしばヘゲモニックな男性性——他の男性性より文化的に優越し「男性の支配的位置と女性の従属性」(100頁)を正統化するような男性性——に準拠し、フェミニズムとも距離を取る。他方で彼らの実践の一部は、ヘゲモニックな男性性に対抗し得るものでもある。

さらに著者は、対抗ヘゲモニー的な実践は集団的になされる必要があるとする。家父長制社会において、対抗ヘゲモニー的な投企や男性たちの感情的なジレンマは「ひとり個人のレベルでは解決されないものなのだ」(185頁)。これらの知見は、第Ⅲ部の政治的実践の議論へと接続される。

第Ⅲ部ではまず、近代化以降のヨーロッパ社会の歴史を辿って、複数の男性性による「ジェンダー関係の複雑な構造」(272頁)が論じられる(第8章)。こうした複雑な構造が様々な男性性のポリティクスを生み出す(第9章)。なかでも著者が着目するのは、ジェンダー関係の平等化に向けた男性たちの実践を表す「脱出のポリティクス」だ(301-307頁)。しかし男性たちにとって、それは実践しづらいものでもある。

著者によれば「脱出のポリティクス」を実現する鍵は、男性性間の複雑な関係にあるという(第10章)。これまで見てきたように、男性集団の間には階級やエスニシティ等が作用し、複雑な利害関係が存在する。著者はそこに異なる利害を重ね合わせる「連合のポリティクス」(326頁、強調原

* お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科

文)を見出し、女性たちをも含む男性たちの連帯が可能になるだろうと結論づける。

内容を確認したところで、本書の評価を次の2点から試みたい。はじめに本書の意義として、平等なジェンダー関係へのポリティクスを男性性——男性たちの集合的な実践の布置連関——そのものにおいて開いた点が挙げられる。「男性²もまた、ジェンダー関係の新しい世界へ向かって政治的選択をすることが可能なのだ」(111-112頁)と呼びかける本書は、男性たちによる対抗ヘゲモニー的な実践の可能性を慎重にも力強く提示する。

次に本書が男性性を単なる男性規範や役割意識ではなく、階級やエスニシティ等と関連しながら複数形を取る「ジェンダー実践の布置連関」として理論化しようとしたことも、男性性の社会科学的分析を試みるオリジナルな議論として高く評価したい。

但しこの意欲的な理論枠組みは、実のところ第Ⅱ部以降では十分に活かしきれていないとも評者は考える。著者は男性性の布置連関を「実践を配置する過程」(94頁、強調原文)であるとして、理論上はその動態性を強調する。しかし第Ⅱ部は各集団の男性たちの実践がどのようなものかという静態的な描写に終始しがちであり、動態的な配置の過程は前面化されない。第Ⅲ部も抽象的な連帯への展望に収斂し、異なる利害をどのように重ね合わせて男性性の配置の過程を変革し得るかについてはあまり深掘りされないことから、初めに提示された理論的視座を反映する余地が残るように思われる。

上記を踏まえ最後に、本書の刊行が日本語圏でどのような議論を可能にするか、2つの観点から

述べる。1点目に、初版を含めれば刊行から30年近くが経過した今、本書の理論的・実践的な耐久性を改めて検証する必要性を指摘したい。男性性を含むジェンダー関係をマクロかつ静態的に描く性格の強い本書の意義、さらには限界をも検討することが求められるだろう。

2点目に、本書の議論と日本社会の接続性である。解説者が「本書を日本語で手にすることができた後の課題は、アジアと日本の男性性を語る言葉を自生させること」(368頁)だと述べる通り、本書の議論を援用するのであれば、日本の歴史に男性性を位置付ける作業が必須だろう。そのなかでは、本書の「男性性」や「複数の男性性」という分析概念が果たして日本語圏・日本社会に有用であるかも問われるはずだ。

本書の刊行は上記の点に限らず、日本語圏における男性性の議論をより一層活発にするだろう。男性性研究に取り組む者のひとりとして、そのことを喜ばしく思う。

注

- 1 日本語圏においては、片田(2001)の*Masculinities*初版の書評などに詳しい。
- 2 原文はMenであり、本書では「基本的には男性性の担い手は集団」(142頁、強調原文)として論じられることから、「集団としての男性たち」という意味合いを含むであろうことを付記しておく。

参考文献

- 片田孫朝日, 2001, 「〈書評論文〉男性性の批判的研究:コンネルの「覇権的男性性」概念の問題」『京都社会学年報』第9号:271-277頁。